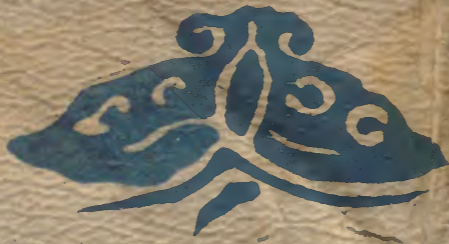


志海



庫文閣内			
函	冊	號	類
二	八	二	和書

三十八



内閣文庫			
番號	和	28420	
冊數	100 ( 38 )		
函號	211	300	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



志本枝理卷之三十八 宝永

学而時習之

禮樂射御書數許多

寺社の付物

志本十二天宗

熱田社清仙伝

埒明

本形寺代々寺上家の寺なり

檜州各序法盛の塔

仮名文字解

源氏八幡宮を氏社と云ふ

察四方事情

以上朱子語類抜抄

氷上嶺子神社月習の事

重盛宗令を傍りしもの

波 咄

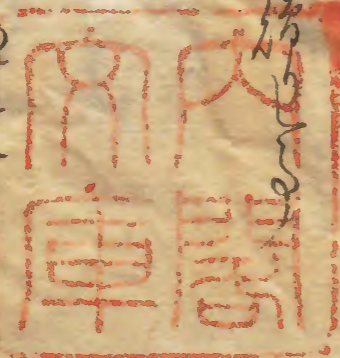
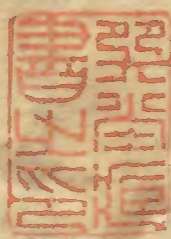
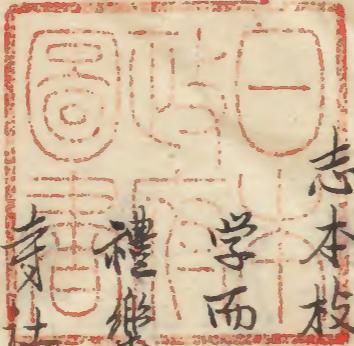
角 忝

若光寺仙田の産屋

仙岩松原の抄物事

熱田の寺塔の事

鎌倉御軍 小森茂



西古<sup>甘</sup>信隆 信隆の御始 香奠の字

名食 仙履

甲を<sup>開</sup>達と云 藪塚

寺即位信家より祝状 其の裏に<sup>幸</sup>祝状

春日四<sup>中</sup>中<sup>姫</sup>太<sup>祚</sup>考 多の卯の<sup>雄</sup>雄<sup>人</sup>人<sup>根</sup>根

道場法師 紀州道成寺<sup>浄</sup>浄<sup>沼</sup>沼

矢艾一<sup>灼</sup>灼<sup>を</sup>を<sup>一</sup>一<sup>将</sup>将<sup>と</sup>と云 毛利掃部<sup>加</sup>加<sup>賀</sup>賀<sup>丹</sup>丹<sup>江</sup>江

か茂の<sup>も</sup>も<sup>か</sup>か<sup>り</sup>り 信長<sup>致</sup>致<sup>海</sup>海<sup>を</sup>を<sup>廣</sup>廣<sup>し</sup>し<sup>時</sup>時<sup>は</sup>は<sup>薩</sup>薩<sup>省</sup>省

信長信忠<sup>坊</sup>坊<sup>官</sup>官 法苑宗<sup>匠</sup>匠<sup>御</sup>御<sup>院</sup>院<sup>宣</sup>宣<sup>業</sup>業

家<sup>徳</sup>徳<sup>公</sup>公<sup>墓</sup>墓<sup>誌</sup>誌 因<sup>法</sup>法<sup>位</sup>位<sup>記</sup>記

尾州<sup>本</sup>本<sup>寺</sup>寺<sup>の</sup>の<sup>水</sup>水<sup>野</sup>野<sup>氏</sup>氏 尚<sup>府</sup>府<sup>の</sup>の<sup>古</sup>古<sup>良</sup>良<sup>流</sup>流

信康<sup>之</sup>之<sup>百</sup>百<sup>通</sup>通<sup>信</sup>信<sup>忠</sup>忠 惣<sup>田</sup>田<sup>祠</sup>祠<sup>友</sup>友<sup>及</sup>及<sup>市</sup>市<sup>人</sup>人<sup>等</sup>等<sup>の</sup>の

僧<sup>法</sup>法<sup>沙</sup>沙<sup>を</sup>を<sup>鑑</sup>鑑<sup>と</sup>と<sup>人</sup>人 池<sup>の</sup>の<sup>銀</sup>銀<sup>多</sup>多<sup>也</sup>也

寛永<sup>十</sup>十<sup>八</sup>八<sup>柳</sup>柳<sup>曼</sup>曼<sup>若</sup>若<sup>君</sup>君<sup>法</sup>法<sup>王</sup>王<sup>系</sup>系 鬚<sup>髪</sup>髪<sup>髪</sup>髪<sup>の</sup>の<sup>訓</sup>訓

昇<sup>為</sup>為<sup>人</sup>人<sup>の</sup>の<sup>帝</sup>帝<sup>王</sup>王<sup>の</sup>の<sup>子</sup>子<sup>也</sup>也<sup>と</sup>と<sup>有</sup>有<sup>也</sup>也 室<sup>那</sup>那<sup>七</sup>七<sup>新</sup>新<sup>帝</sup>帝<sup>即</sup>即<sup>位</sup>位<sup>奉</sup>奉<sup>事</sup>事<sup>也</sup>也

正<sup>徳</sup>徳<sup>元</sup>元<sup>定</sup>定<sup>公</sup>公<sup>公</sup> 鯉<sup>魚</sup>魚<sup>風</sup>風

正<sup>五</sup>五<sup>七</sup>七<sup>月</sup>月<sup>の</sup>の<sup>風</sup>風<sup>日</sup>日 矢<sup>の</sup>の<sup>中</sup>中<sup>を</sup>を<sup>取</sup>取<sup>て</sup>て<sup>水</sup>水<sup>を</sup>を<sup>人</sup>人<sup>に</sup>に

難<sup>人</sup>人<sup>症</sup>症<sup>疹</sup>疹<sup>の</sup>の<sup>疾</sup>疾<sup>也</sup>也 系<sup>圖</sup>圖<sup>の</sup>の<sup>傳</sup>傳<sup>を</sup>を<sup>正</sup>正<sup>徳</sup>徳<sup>年</sup>年

半<sup>上</sup>上<sup>家</sup>家<sup>の</sup>の<sup>兼</sup>兼<sup>友</sup>友 平<sup>光</sup>光<sup>氏</sup>氏<sup>の</sup>の<sup>系</sup>系

席<sup>尾</sup>尾<sup>孫</sup>孫<sup>兵</sup>兵<sup>衛</sup>衛<sup>流</sup>流<sup>策</sup>策<sup>流</sup>流<sup>の</sup>の<sup>流</sup>流 津<sup>島</sup>島<sup>四</sup>四<sup>本</sup>本<sup>七</sup>七<sup>名</sup>名<sup>字</sup>字<sup>系</sup>系<sup>也</sup>也

古<sup>山</sup>山<sup>半</sup>半<sup>地</sup>地<sup>截</sup>截<sup>く</sup>く<sup>為</sup>為<sup>田</sup>田 仕<sup>官</sup>官<sup>富</sup>富<sup>室</sup>室<sup>競</sup>競<sup>吉</sup>吉<sup>田</sup>田

尾<sup>三</sup>三<sup>駱</sup>駱<sup>を</sup>を<sup>乃</sup>乃<sup>國</sup>國<sup>造</sup>造

○朱子拳學而時習之聖人下五箇字无一字虛學  
然後時習之不學則何習之有所謂學者不必前  
言往行凡事上皆是學如箇人好學其為人箇事  
好學其事習之者習其所學也習之而熟能無悅  
乎 語類百十八

須接四方之賢士察四方事情覽山川之形勢觀  
古今興亡治亂得失之迹這道理方見得周徧  
百十七

如禮樂射御書教許多周旋升降文章品節之繁  
豈有妙道精義在只是也要理會之得熟時道  
理在上面亦如律曆刑法天文地理軍旅官職之

類都要理會雖未能洞究其精微然也要識箇規模大概道理方決洽通透若只守箇此一子捉定在那裏把許多都做州事使都無事了如此只理會門內事便了不得所以聖人教人要博學須是博學之審州之慎思之明介之篤行之同上

嗚呼先師教為廣大如此今學者其規模狹小一線上就天理究見如所謂葦百物然後觀化工之神象格然後知作室之用者豈能せんや夫齊家治國天下之事忘せん於予ハ心胸ヲ撒開シ事物理通透順逆常變理會シテ障礙ナカラシトテ欲スヘキモノカ其讀書ノ法ノ如キハ先ニ讀

書範一篇ヲ著シテ童蒙ニ授ケシ

○ 寺社の什物を何の用もなき古急を存せし宝を  
灸せしを竹生島宝蔵に云上段登壇あり我志  
法田の神庫法宝物のき中ハ白菊の法段登壇の  
く車登壇のきくき物あり有るのを一存し

○ 氷上師子神社を熱田字のあまより糸屋法代に  
祓正藏として毎糸付て祓詞を勤むをき以大字  
司家底あり熱居法代に甲申糸上の初友久米氏  
河上曰尚社ハ熱田の布部として久米氏代ハ神事  
と信以終るるを由古き月形を以て熱田祓詞を  
とく神事を勤むるに尤例よりしるるをこの

此を致しし仍て且司尾法氏と詰問以田島氏古  
後文を半して曰右上の祓正儀、家祭目より年々  
於中尾法氏仲奉り儀状の如しと云

讓与諸職之事

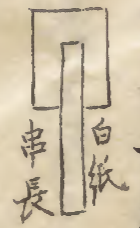
- 一 祝師職當屋敷家等
- 一 社職給歩私領其外悉
- 一 氷上祢耳其外諸職等

當知行分惣領職事

右代ニ本重書等相別而在京亮範仁一圓所  
讓渡実正也但庶子配分之事為成敗少可有  
扶助惟如此定置上親類非妨者也仍為後日

讓之状如件

明応六年五月廿一日 権官司祝師尾張守仲奉判  
新のこゝあはる米氏、此を、私に、  
社事を司、  
○ 密家讓与の時、  
十二津を、  
あり其事、  
河系、  
り但、  
札、  
と、



白紙  
串長一尺二寸

○ 密家讓与の時、  
十二津を、  
あり其事、  
河系、  
り但、  
札、  
と、

○平家物語に少松重盛令之少面を中華より送了二子  
 西帝よりわしを一つ面は育王山の傍へ送り川 即仏  
 照禪師元徳附して帝へもまうりりる所五百所の田  
 代を育王山へ寄り川へまわす時の詔事たりとて  
 細川氏の家系ありとて 仏照の馬  
 王珍求頌要修行 日用心須痛著便  
 會得介中端的意 從 日午步三更

仏照老僧

古

判事終休らしき文もあはれ重盛宋にも念を奉  
 りしに宋史にありん但宋史四百九十一日卒の條乾

- 道九条附則州細首以方物入貢云々其高  
 倉後義家之也出づるは重盛植念の時なりや
- 四月の熱田の社権仏言を花のごとくと稱し  
 京師の俗四月のは一及び新花を竿の先へ  
 法付て九輪のごとく一故に立く花のは熱  
 田の花乃ごとく一剪彩花をあくつるむりし生花を  
 以てはせんはせんはのはんはんは
- 漉 字書に水調粉麩と云々俗に云々はんはんは
- 咄 説文咄相謂也双口出声云々俗に云々はんはんは
- 物の屈塞を用いしをはんはんは

○ 小一夜非響をうのけ平りうと地をひひ人のま付  
りう振りし次の日と美氏の猿楽始て地をあうて  
祿をよとててり信人共ううのをわりの地  
とて信信に存良りうの地とわや

○ 角黍 端午時食 唐土に糯米ありく水もむく洗ひて

水のなき中へにきくを竹の皮のうに共あうとく

包し胡桃を入く火をゆるく焼く煮或は石灰のあり

も収包物を去り純まて切て食んウラシヤのあり

○ 本願寺代と半と家の子う成を道に信入判修良

賞如 檀中納言 兼侍者子 善如 檀大納言俊光者子 ゆき名俊云

賞如子先玄共才慈俊俊俊光者子信道共

本願寺の住子除く

緯如 檀大納言時光 者子名時茂 巧如 従一位資康 者子名玄康 代い如

蓮如 徳内大臣兼宣 者子 実如 左大臣俊光 者子

圓如 檀中納言永徳者子ありし 他系如を一代より立む

はる信の子うを初や俊介の子うて信をう  
すうがうにや共よ仏光の心あうん

本願寺親重り子者重り其子如信り縁存賞り子

檀大信如細藤 号善欽 上人 江州深藏寺の開祖也

○ 善光寺の佛始尾張國守田宿も宿め其子慈云  
をたう立白のうも信と云い

按し彼像を白のすうとかなるまを信を信りは信事





装束狛鉾抄録のすゝを誤る者あり竹久は  
神人をもあやしくして日本武尊未征のすゝのいなり  
ふこをくけし水府

○或曰八幡子を源氏の氏神とす且与矢神とす  
源氏の法和帝の孫也法和の孫男心とを神を勧請  
せし所の亦与矢神とす神功皇后之韓を征し  
いふくふくして云八幡子を源氏の氏神とす  
唯我帝の勅なりと云源義家男心と云  
八幡子をたすも人の心よりたす男心をたすも人の義  
家の家門抄書昌して源氏とすと云きりなり  
皆石清水を以て氏神とす亦八幡をたすも神とす

事注宣集六の八幡大系後現七十許為白  
髪辨持白木之り以藤卷之矢立岡上之抄  
云是抄門を征し

○源頼朝 小字鬼武者任右大将

源頼家 按愚管抄義時使人刺頼家而尚不死  
因纹其咽拉陰囊弑之

源実朝 義時謀使僧公曉弑之尋殺公曉

右三代將軍四十年

藤原頼経 征夷將軍承元元年入鎌倉

藤原頼嗣

右二代謂棋家將軍

宗尊親王

惟康親王

久明親王

守邦親王

右四代謂親王將軍家

平時政

義時

泰時

時氏

經時

時頼

時宗

貞時

高時

右為北条九代

見代に將軍執権次第及北条家譜等

○ 兩六波羅

承久三年六月平時房居六波羅南方泰時居北方是兩六波羅之始也

鎮西奉行職 文治二年十二月天野遠景始守九州

○ 香典 此の儀香奠とす、此より典をおきのり云

儀

傳訓として物の代りふすり也香儀とて同儀の擬たり儀はすりゆりゆり典字に可考四字通亦訪し朝回日典春衣此典の字と同一

○ 寒食の周禮に仲春禁火于國中云是旧俗也

三月五日火を焚く三月の節に改火を法照より秦中歲時記に清明の日厨糶よりあり玉燭

宝典に重食博市厨糶為歳と記す我國於家

より以下鶏舎をすり三月三日也亦を清明法の人

三月三日を法照より三月三日を祭掃は是奉三月

の節より上は儀節より重食法照より奉

をも皆三日より作り靴鞋の歳も重食法

明もよすり也 と在時の人三月廿日墓所を  
ありて法修す

○伽羅 翻黒 陀羅尼集經曰堅黑沈水云々今清

人謂之奇楠時珍曰 本州細 置水則沈故名沈水

亦曰水沈半沈者為棧香不沈者為黃熟香南越

志言交州人稱為密香梵書名阿迦嚧香

○甲を樹逢といひ乙を旗蒙といふ疑を宋陽といふ

寅を撰提始といひ卯を單闕といふ等歲法を祿氏

介雅の中より丹江録といふ星書に古一の支于

を只用ひて目をすんを以てを記すといふ身と

記すりに宋陽宋陰を用ひるゝ温公通鑑に紀

年歲陰を毎より古も存する意ありといふ甲子

を日を りりり 儒訓日よといふ元程刑易

の少雅の隨を凡そ考すといふこの俗字者目を去く

もも樹逢因數を記して物に影をりたり

○人遠死しを所を埋むを藁葬于藁塚側立木牌

於墳者人の潤泉日記あり藁塚を我國乃野墓

有り文作備へし抄人

○一筆波紋といふは先月廿五日即位お海の中也

形也怒目お衣を存し因茲為法祝儀使者を以て

一様お指執お在し不若思ふも可於法持法於

存し於中

公方極法持極能波為成法在怒悦之云奉存し

此等ノ類宜ク法成ニ從使者也福轉ニ是可  
ト云ハ忍收謹之

月日

松平下野守細貫

右モ法即位ノ旨御事取法大為ノ事法後法  
ト云ハ收也亦モ文法外也

一筆法成トハ先必ト一度禁裏法位ノ法出来  
去月十百法遷章ノ事也後ノ因茲者法トハ  
中上御事取法大為ノ事法後法

月日

松平兵部左輔

右モ外中法遷章ノ事也後ノ因茲者法トハ  
法後法收也亦モ文法大為ノ事

按テリト末代ノ事モ亦モ家乃法徳新ノ如ク  
莫ト宝祚之隆富々天壤無窮トテ神勅今モ  
ト云ハ法事取法大為ノ事也

○春日四所中姫太神を天照を祚と云ハ説也  
モリ於テ神名秘書及帝王編ノ事ハ説也  
姫命也春日ノ社同祝詞亦同之

信景按テリト神始ハ平岡社トテ事法  
ト云ハ姫命ノ忍徳耳ノ事也  
ト云ハ水ノ右神女ノ相殿ト云ハ左モ  
思彦命勲功也ト云ハ臣神也君王  
ノ母后ト云ハト云ハ神階ト云ハ思彦命ノ

下子ありて何なり

三代実録曰貞観元年正月從一位勳三等牧圀  
天子屋根命神授正一位四位上勳六等牧圀比  
咩神授從三位云々

延喜式神名式河内國河内郡牧圀神社四座云々  
同祝詞式祭春日曰鹿島坐健御賀豆智命香取坐  
伊波比主命牧圀坐天之子八根命比賣神四柱  
云々

上の之神ノ鹿島多取牧圀之命を祈ル比賣神  
山所の大蛇は牧圀ノ元姫神左見座根命と連  
て稱する所はけし流家の田記神を考懐

姫ノ事ニシテ疑ハカシクも亦位ニ於テ  
安カシクありて此家のノ事ニシテ  
オモフ  
多クありて是ノ事ニシテ姫神ノ蓋シ見座  
根命ノ姫神ナリトハ知ラズヤ平岡神社ニ中  
臣平岡菅生村山川騷等河内ノ神別ノ氏社  
ナリト他神ノ事ニシテ春日ノ於テ  
姫大神乃ハ若菜ノ命ノ神長孫ノ一ツ  
寺ノ事也西ノ位大中臣師等も中ノ事也  
亦也其ノ事ニシテ春日ノ事ニシテ  
カノ大社ニシテ此ノ氏社ハ山祠ノ事也亦  
在也亦シテ春日ノ事ニシテ春日ノ日

の形跡を考懐しりしに疑つて幅に横して  
女子を崇めたりと麻島多取の神は皇孫剣  
業の功臣牧田の神は魏改の始塔國々に大功を  
の神たり亦姫神は我國香瀨の始祀は太神を  
のお為に皇孫の神ありて品減女の先を  
命り命をりて終りしん

○鳥の玉子丸くくたまやうらうらに雄としてあやうぶ  
さき雌たり亦卵の目しき方卵さうあし  
卵しくんし雄卵にさきさきさきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき  
生し侍る自然として定の理あり人も男やし別生す

松佐の竹自定もろを仙若愛如男子の法ありなん  
しんしん生化の玉を熟き利を約に尤惜りしん

○本朝文輝の都良香所述道場法師傳云法師者  
尾張國阿育郡人也と尾州古く八郡として  
阿育郡あり亦知郡の語は道場法師其地の村里  
のそと下しを法を法しきと法しきと法しきと法しきと  
まじひ流りて首尾お斗りては並並とてりて  
のそと下しを法を法しきと法しきと法しきと法しきと  
南紀元母寺の傍たりしと尾州に元母寺の  
尾州あり尾州の元母寺は南紀の寺なりしと生れ  
たしと南紀の地なりしと南紀の寺なりしと生れ

此の所へは寺を牛立村より一と一軒其  
と新本野寺の門庭といふ事ありて  
此の寺は源氏  
の所なりと爲りて古伝の所傳ありて  
此の寺は源氏  
不爲爲の尾流といふ事ありて  
此の寺は源氏  
せしむる事ありて

○ 能州道成寺鐘今京師妙満寺日蓮宗あり其鐘曰

能州日高郡矢田庄

文武天皇勅願所道成寺治鐘勸進比丘別當  
法眼定秀壇那源万壽丸并吉田源頼秀合山  
諸壇越男女大工山願道願小工大夫守長延

曆十四年乙亥三月十一日

按ずるに源氏の源義朝より仁孝天皇五月の皇子  
八人より源姓を賜ふ事あり先女履の村源義朝及  
源義朝より源氏の源義朝の字は源氏の源義朝  
○ 灸艾一灼を一壯より東吳の源氏より三條齋筆云  
用艾一灼謂之一壯沈存中曰以壯人為法其言若  
于壯壯人當依此數老幼羸弱量力減之と云今  
の庸医人をして壯盛たりとむるは壯より沈氏の  
説を凡そあやしく大なり

○ 毛利掃部助及加賀井餘八郎兩人は尾州中島郡  
右須庄小野村真禰寺乃家老なりと云其臣

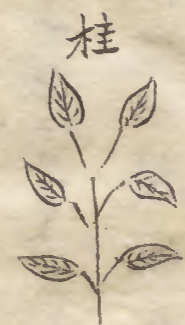


家の幕下し米地の米事を治す

毛利をヤカミ村を代りて  
加賀舟の関原役法缺とす

按りて、河村上院皇子仁論法親王志福寺啓  
の時此西氏坊官たりて、  
よ近化の儀自西を押戻  
して居候せしと云

○如夜念と葵桂西種せりるかつて物とす



葵ハ木ノ下ニ生ルノ花也  
葵ハ人徳知候かつてを記す人

○平信長法皇の御詔を廣く横おさるるを  
左大と柳橋を拙しむ時と田畑の費多し時の高貴  
し世も地獄道と悲樂人は鬼  
をたす濁り酒をりて

信長生害の後太政大臣を儲り信忠左大臣を儲  
り一代の中系内ぬ突の徳もり冠帯の儀も  
たすてりて後官のせりて

右も三季物免の儀也

○法華宗追卻 院宣案

被院宣補近日有一類之僧徒為諸宗讐歎禁誡  
之趣嚴制先畢而無憚憲章不恐勅命乍居於洛  
陽結黨於道場引率弟子同朋妄稱法華持者号  
之自宗飽破仏法天台之所訖月氏之教相豈如  
斯乎雖以展轉隨喜之功德忽犯誹謗正法之罪  
障以外道之行儀偏表邪要案本朝之比附爭道

科坐或為國為法不可禁宜仰願衛追卻京都旨  
院宣如斯仍執達如件

延慶三年三月八日

吉田中納言ナリ  
權中納言定資奉

謹上

中御門中納言

別當殿

同別當宣

法華宗門事

任被仰下之旨彼一類僧徒早可被追却洛陽之  
旨別當殿仰所候也仍執達如件

三月十一日

前土佐守栄業奉

謹上

高倉博士大夫判官殿

○家綱公墓誌

人見友元制

寛永十八年辛巳八月三日降誕

征夷大將軍從一位右大臣

延宝八年庚申五月八日薨

御位記

從一位源家綱

右可贈正一位

中務威神万邦化溢四海勇智安世武德互  
今宣遵慎終之礼式羨贈爵之恩可依前件  
主者施行

延宝八年庚申五月廿一日

中務卿 嗣

正四位下行中務太輔臣源朝臣資冬宣  
正四位下行中務少輔臣藤原朝臣祐宣

○尾州守也の久野氏或亦友原名考叙を後を  
考心按ずるに春日井郡久野村に久野正照の  
古系圖あるに高望王の三男法守府守平良兼乃  
子武藏守公雅の裔也治承四年四月の下知收公  
代しの古後依好しと申すを野原合戦の時其氏  
水野守と稱する小文高師直の母並義より  
師上乃小久の野平七海と存水野致影  
存永十九日の春備中もたに但人其日宣と致す

備中もたに存永十九日三月庚申平以上久野村  
感有るに葬一義を後仁孝宗知居生るるに  
も亦先祖小田郡志徳郡日城を八条院より補し  
とすのり伏木敷あり久野の麻屋志徳氏  
久野代しの城地は上久野村の内一色と地あり  
村より十三三所 水野久次は滅田内府も佐百也との  
地を依り内府に依り存中今も存凡備中もた  
と正照を八代父と申す府下と伝す漸叙を起し  
知也の久野も皆一系也存中もたも存永をり久野  
源氏を依り

○當府礼家吉良流







唐橋侍從在廉  
曲儀 高辻少納言總長

大將代

左 池尻右兵衛權佐共條  
右 土御兵部少輔泰連

次將

左 押小路左中將実岑  
川籙左中將実詮  
藪左中將嗣義  
右 山本右中將公尹  
花園右中將実仲

櫻井右中將氏數

撰政太政大臣家熙公外畧之

於東都三家及諸大名登城賀御即位

同八年辛卯正月元日天皇御元服

同年四月<sup>九</sup>五日甲申改元正徳元年

尚書大禹謨曰正徳利用厚生惟和 高辻大内記總長朝臣勘文

改元定公卿

- 二條右大臣綱平公 九條右大將師孝卿
- 三條大納言公統卿 冷泉中納言為綱卿
- 久我中納言惟通卿 鷲尾中納言隆長卿
- 六條宰相有藤卿 野宮宰相定基卿

万里小路宰相尚房卿

同五月朔日關東頒告改元於諸國諸家登城賀之

○鯉魚風 八月の風

黄省風の風 六月 東南

送窮 正月晦日也月尽を為窮

迎福 二月二日(大)月新(小)為福

○臘日ハ十二月のこしこしハ人医を敬ふハ正月朔日を天臘と云五月五日を地臘と云七月七日を道徳臘と云十月一日を五帝臘と云十二月の臘日なま王侯臘と云也

○魚水中もまきく水を凡ん人を氣中もまきく氣を凡ん惟屋漏日光の中もまきく塵埃をまきく

奔忙ヤリをまきくまきく一を空の内をまきくも静小こ水を凡んハ疾風をまきくまきくまきく一在園く亦得野馬塵埃をまきく水を以てまきく

○韃靼の種族生まきく瘴疹の疾外ハ毛毡醜を食ハらるを以てハ疾也まきく其今此疾あるハ中國の尖市して中國の飲食を学少なるハ瘴疹あり於るま一人此疾あるハ昇て涼岩の中も益も生み於る居まきく証を以てハ秋乾と云も散く省想(カクシ)まきく我國ハ友島瘴疹を病者ありま紀州熊野の邊桑の里まきくやの俗も韃人のまきく山中も於て時ハ飲食を欲るもまきくまきく樹枝をまきくまきく







○平岩主計頭与削親吉 — 平岩七之助親元 駿河大納言 家奉仕

女子  
女子

堀勘解由

仕増山彈正少將  
堀勘之由養子トシ

堀年人信重

平岩七之助

右堀年人信重ト野小妻右妻ト之婿ト云云  
凡々トテ親吉子孫ト云々ト云々ト現ノ勘解由  
ト流ト住セヨ此家ノ故人ト云々ト云々

○当府濱の師島虎尾孫吾流流の管流の分派

越前人

虎尾孫兵衛

夷勘兵衛

浪人

田辺八左門

始大野主馬家人  
後仕尾公

佐分吉兵衛

此分流多シ

津田権之丞始を佐多の才子佐分夷子由りて  
之許可を請ふ津田一流乃其流林平之丞

○尾州津島四家七名字寄合組

備

一番

津島

堀田宮五郎

恒川久藏

大橋清兵衛

寄合

野々村又右五門

中村弥助

飯沼高平

人數三千外出夫共

守山村

大永秀村

大曾根村

井田村

井納村

稻葉村

瀬戸川村

赤津村

右八ヶ村之内三千五百四十三石分之夫出

二番

津島

大島長兵衛

河村久五郎

先賀三右五門

鷲巢主水

寄合

材木松五郎

武藏助十郎

人數二千七百外出夫共

平島村

佐屋村

高木村

上奈良村

町屋村

佐野村

一色村

時島村

大少寺村

河北村

栗柄村

右十一ヶ村之内五千二百石九斗分之夫出

津島勢  
外十リ

三番組合

織田勘七郎

大橋清兵衛子息

山川傳左五門

中根越中

平野右京

河村久四郎







